

# アッシュ

—大宇宙の狼

田中光二





アッシュ——大宇宙の狼

田中光二

アッシュ——大宇宙の狼

八八〇円

第1刷発行 昭和53年10月30日

第2刷発行 昭和53年11月24日

著者 田中光二

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(03)945-1111 (大代表)

振替 東京8-3930



印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。  
© 1978 KOJI TANAKA

アッシュ——大宇宙の狼

## 目次

### 第一部 銀河の復讐者

ザタールの血と砂 7

流刑の惑星 32

禁断の惑星 57

第二部 アッシュとテスの女王

霊能者<sup>イースバ</sup>ハジ・アミン 87

戦士テッシオ 109

将軍ダイモス 127

傭兵隊長サルゴン 146

テスの女王シャミーン 162

タジク砦の冒険 180

ミトラ峠の決戦 216

あとがき 234

装画／加藤直之  
装丁／井上正篤

第一部 銀河の復讐者





## ザタルの血と砂

私は、鳥型飛行機オーストリッチの翼の残骸の上に腰を下ろしたまま、地平線のかたに沈んでゆく巨大な太陽——ザゴラを眺めた。巨大な暗赤色のその恒星は、MM2610と呼ばれる銀河辺境の太陽系の主星である。

まもなく夜がやって来る。四十八時間も続く、長く脅威にみちた夜。「大草原」のさまざまな狩猟獣どもが活動するおそろべき夜だ。

が、べつだん私は、死を恐れてはいなかった。三百年も生きると、死はすでに生理的な畏怖の対象ではなくなる。それはいつわが家の門戸を叩いてもいい友である。私はすでにこの宇宙の——幾百とも知れぬ文明世界とその主人たちの営みの——栄光とその裏にひそむ地獄とを知り尽している。

運命が許すならば、世界を識るための巡礼を続けることもいとわれないが、疲れを覚えて来ていることもたしかだった。いずれにせよ、死を心安らかに迎える準備はすでにととのっていたのだ。

運命は、いささか皮肉な仕事をやってのけたともいえるだろう——副都ザコニッツから、首都ザーネンへの定期便であるこの二十人乗りの鳥型飛行機オーストリッチが、イナゴドリの大群にぶつかって墜落したそのとき、命をとりとめたのが私一人だったとは。

むろん地上に激突すると同時に、他の客と同様、私は機外へ放り出されたのだが、それが柔かい布張りの翼面だったことが幸いしていたのだろう。奇蹟的にも、文字どおりかすり傷一つ負わなかったのだ。パイロットや他の乗客たちはそれほど幸運ではなかった。彼らの半分は即死し、重傷を負った残りの連中の中には、墜落してから六時間たった今、呼吸をしている者は一人もいなかった。

た。

彼らザタル人が、ひどく自己暗示にかかりやすい種族だということもその悲劇に力を貸していたのだらう。独特の宿命観を持っており、定めに逆らうことを潔しとしない性向がある。この事故が、彼らに死を約束していたのだと悟り、生き抜くための粘りを捨てて、従容と死んでいったのかも知れなかった。

しかし死は、なぜか私だけを避けて通りすぎたのだ。私の心を一瞬のぞき、そのなかば悟り澄ましたような心境を小面憎く思ったのかも知れぬ。それをさらに劇的に受け取る者に与えるべく、去っていったのだらう。

——しかし、それもつかのまの猶予というべきだったろう。前にもいったように、惑星ザタルの北、大陸の未開の草原地帯で、たった一人、裸一貫で放り出されることは、即、死を意味する。

巨大な食肉狩猟昆虫の群れを始めとして、摩訶不思議で悪名たかい大型狩猟動物もが弱肉強食を繰り返している世界なのだ。身に寸鉄もおびぬ——それは私の主義であるからだ——、老いばれたヒューマノイドの一人にすぎぬ私などは、闇が訪れて一時間も経たぬ間に、もつとも手近の彼らの一頭の胃袋におさまってしまうのだらう。ザミンとザールの二つの月がその殺戮の唯一

の目撃者だ。が、彼らとても何の感慨も抱かぬだろう——それはあまりにもありふれた光景だからだ。

私は頰杖を突き、やがて、頭が膝の間に垂れた——理不尽な眠気が襲って来たのだ。ぎっしりと意識に堆積された過去の、どんなイメージの断片も浮かんで来なかった。意識は、おぼろな灰色の霧に閉ざされた荒野であり、奇妙に甘美な睡魔がその上を覆い始めていたのだ。

——物音が耳に入ったのはそのときである。金属の器を打ち合わせるような、乾いて賑々しい物音。ゆっくりと立ち上がり、それが聞こえて来る方向を見はるかした。人間の内部で、最後まで生気を保ち続けるのは、おそらく好奇心だらう。それが、なかば無意識のうちに私を立ち上がらせたのだ。

草原のかた——二百メートルばかり向こうを、奇妙な縦列が押しわたっている。夕陽にその横腹をあかがね色に輝かせている、十台あまりの台型の荷車と、それを曳く巨大なけものたち。

隊列を取り囲むように従っている数十騎の騎馬のすがたも見える。

私は大きく吐息をついた。複雑なものないまざった吐息だった。死に神は、私を連れ去ることを本格的に延

期したらしい。

それは隊商だつた。北の大陸の西方、都市ザ・ネンとザコニツツの中間に位置する未開地帯へ、交易に赴いていた一隊だろう。その地方に棲むザタールの原住民族のうちでもっとも未開のザイタン族は、機械文明を病的なまでに嫌っている。彼らと接触し、貴重な香料——エキセントリックな幻覚物質をふくんだものだが——を入手するためには、昔ながらの、ワゴンを連ねた隊商のよそおいでなければむずかしいのだった。

小型の宇宙船はもとより、鳥型飛行機を使うことも論外である。多くの危険を排除しつつ、陸路を踏破する以外にみちはないのだった。

その荷車は、ザタール産のチタンを使った特殊合金で鍛われている。それを曳くものは、やはりザタール原産の、偶蹄目に近い巨大で鈍重な哺乳類——タンタルと呼ばれる、地球の猿に似たけものである。当然のことながら、危険を見越して、重武装した護衛隊がキャラバンには従っている。野獣を始めとし匪賊の襲撃に至るあらゆる脅威から、キャラバンを守るのが彼らの役目だった。

では、飛鳥機が墜落した地点は、そのキャラバン・ルートの一つの間近だったのだ。そのことを知っていれば、同乗のザタール人の多くも死なずにすんだろう。

が、すべては手遅れだった。私は凄惨なその光景に最後の一瞥を投げ、生ける者たちに加わるべく、疲れ切った体に鞭打って走り出した。

走ることとはさして困難ではなかった。「大草原」には、さまざまな植生が分布しているが——なかには強力な食肉植物の群落も見られる——、このあたりを支配しているものは、丈が私の膝あたりまでしかない、ごく無害な種の草だったからである。

キャラバンの歩みは遅々としていた。私の足でも追いつがすることはたやすかった。叫びを上げながら私は走った。その後尾から百メートルほどの距離に迫ったとき、後衛の一騎が私に気付いたと見え、手綱を返して、向かって来た。

彼ら護衛隊が乗っている馬は、ザタール産のものではない。はるばる地球から輸入した原種に遺伝工学をほどこしたキメラ種である。サラブレッドの俊足に、惑星アゴラ産の猛獣である剽悍無比の縞狼の頭部を持っている。その俊足をとばして、彼はたちまち私の前に立ちちはだかった。

彼は、すでに腰のハンドガンを構えていた。地球から輸入した、超小型核弾頭をそなえたミニ・ミサイルを発射する銃である。猛禽のようにきびしい、無表情な顔

が、いつでもその致命的な武器を駆使しうる体勢をとりながら、無言で私を見下ろした。地球の植民者の末裔であることは、その体型から推して間違ひなかった。が、革の戦闘服に包まれた体軀は、私が知る限りのどの地球型人類をもしのいで魁偉であるようだった。青銅の鎧型からそのまま作り出されたかのような、底知れぬ逞ましさと、そして非人間的な何かを発散している姿だった。

私は、かすかに身ぶるいした。人生の辛酸をなめつくしている私にしてありえないことだが、その目が私を戦慄させたのである。それは、生命に対するあらゆる尊厳を拒絶している目だったのだ。

が、その睨み合いは現実にはごく短いものだったにちがいない。男は、ゆっくりと銃を腰のホルスターに戻し、くちをひらいた。

「じいさん。こんな物騒な場所で、一人でどうしたというのだ？」

容貌に似つかわしく、すべての感情をやすりで削ぎおとしたかのような冷やややかな声音だった。

「私の名はルカン。メトセラ族の者だ。ザコニッツからザーネンへ向かう飛鳥機に乗ったのだが、事故で墜ちてな。この老いぼれ一人がたすかってしまったのだ。

『大いなる意志』が、わしにまだ生き永らえよとお命じ

になつてゐるらしい。迷惑かも知れんが、ザーネンまで連れていつてはもらえんかね？」

「——よからう」男はゆっくりと頷いた。

「客が一人ふえたとしてべつだんタンタルどもにはこたえまい。が、大枚の謝礼は取られることを覚悟しておけ——このキャラバンの主は、ただで人を運ぶほどお人好しではないからな」

男の鉄柱のような腕が伸びて来たかと思うと、私の体はたちまち宙に浮き、次の瞬間には馬の尻に乗せられていた。

## 2

男のいった通り、キャラバンは私を歓迎した。正確に表現すれば、クレジット金貨のつまつた私の財布を歓迎したのである。少なくとも私は金には事欠かぬ身分だった。メトセラ族特有の年輪に裏打ちされた知恵には高い値がつく——私が渡り歩いた多くの惑星の支配階級の者たちには、その知恵や知識をよるこんで買う者が少なからずいたのである。

およそキャラバンを組む商人たちで、利にさとくない人間はいまい。中でも、この隊の主であるザイモンは、

その点ずば抜けていたともいえないよう。惑星ザタルのあまたの原住民においても、彼の出自であるザモール族は、経済感覚にもっとも恵まれていた種族だったからである。

もっとも、しかるべき挨拶をすませてしまえば、彼はつき合いくらい男ではなかった。今私は、みずから先頭のワゴンの手綱をとっているザイモンの傍に坐っている。旅の無聊をつぶすには絶好の相手だったのである。

——すでにキャラバンは、ザーネンの都市から百キロ足らずに迫っていた。旅は終わりに近づいていたが、しかし安全が保障されたわけではなかった。首都の近郊といえども、匪賊の脅威は去ってはいなかった。「大草原」は余りに広大にすぎ、治安はほとんどいいほど行き届いてはいなかったからである。

私は馭者台から振り返り、あの男の姿をさがし求めた。護衛隊長の任にふさわしく、彼は常に、もっとも重責である後衛を受け持っていた。ゆったりと馬を打たせている彼の姿が、キャラバンの末尾からさらに離れて、ぼつりと小さく見えた。しかし表情も定かではないその距離から眺めても、彼の存在自体が放つ凄味は、痛いほどに伝わって来た。

「そういえばまだ聞いていなかった……」

私はさりげなくいった。

「あの男——隊長の名は何というんだね？」

「やつか。やつは『灰』と呼ばれている」

木の実を噛み続けているがための不明瞭な発音で、ザイモンは答えた。おそるべき飢えが、常にこの肥った中年男にはとりついていられるらしい——何かを口に入れない彼にはついぞお目にかかったことがないのだ。

「灰？」私は眉をひそめた。

「妙な名だな」

「むろん、本名じゃなからう」ザイモンは呻くようにいった。

「が、名前なぞどうでもいい。護衛隊長は、腕が立つて手下に睨みが利くかどうかが肝腎なのだ。その点やつは申し分ない。おそらく、ザタル切つての手練れだろうさ」

「ふむ。今まで何をしていた男なのかね？——ザタル人とも思えないが。まさか生まれついでに雇われガンマンでもあるまい」

「知らんな。やつは過去の謎に包まれている。ザタルに現われたのは最近らしいが、それまでの経歴は、誰も知る者はいないのだ。やつも自分から過去を語ることはぜったいせんのだ。

いずれにせよ、敵となつてあの男の前に立つことだけはご免こうむりたい——そう思わせるタイプの男さ、やつは」

ザイモンの詠嘆が終わるか終わらぬうちだった。非常警報を示す鋭い呼び子が、草原を響きわたった。左右の両翼にふかく張り出している斥候の一方から発せられたもののようだった。緊張が、全キャラバンに電撃のように走るのを感じられた。キャラバンを押し包んでいた護衛隊の全騎が、網をしぼるかのようにその間隔を縮めるのが見えた。

「匪賊だ！ 私は直感した。」<sup>「大草原」</sup>に住む剽悍なザッコ族にとって、キャラバンは甘い汁気をたっぶりふくんだ、またとない獲物である。むろんまず棘を払いおとさねばならないが、ザッコ族は闘争を第二の天性とする生まれながらの戦士なのだった。

ザイモンの動きは巨体に似ず敏捷だった。手綱を放り出して、背後の金属で装甲されたワゴンの内部へ駆け込んだのである。

「早く来るがいい、ルカン！」彼が呼びかけるのが聞こえた。

「見物なら、安全なこの砦の中から出来るぞ」

私は彼に従つた——たしかに、私たちがザッコ族の矢

面に立っていてもどうなるものでもない。戦うのは専門家にまかせておけばいいのであり、見て、ひたすら記憶にとどめるのが私の本来の仕事なのだ。

この先頭のワゴンはザイモンの居室をかねている司令車である。内部には快適なベッドと贅沢な調度が凝らされており、入口のシャッターを閉ざしてしまふと、堅牢な装甲をもった、彼のいう「砦」に変貌してしまふ。

側面には、それぞれ硬質ガラスをはめ込んだのぞき窓がしつらえられてある。私たちはめいめい、それらの窓にとりつき、外をうかがつた。

警戒陣を縮めた二十騎の護衛は、今や完全に停止したキャラバン隊の周囲を、流れるように駆けめぐり始めていた。流動的で切れ目のない防禦の円陣がそこから生まれていた。

——草原のそこかしこから、喚声とともにおびただしい人馬が湧き上がった。といっても、いささか不細工な、滑稽な感じさえ与える姿だった。ザッコ族の「乗馬」は、護衛が乗りこなしているような颯爽とした動物ではない。「大草原」に棲む、六本足の巨大な齧齒動物を飼ひならしたものである。

ザッコ族そのものも、地球の基準でいえば小人族に属したろう。まさに飢えたねずみを思わせる、痩せた四肢

と青白い肌を持った、美的感覚とはほどとおい種族だった。同時に彼らはもう一つの特質で有名だった——ずばぬけた残忍性である。

いったん喉笛に食いついたが最後、骨までしゃぶるように、犠牲者のすべてを喰い尽してしまうのが、彼らの習いだったのだ。

私の見る限りでも、今、四方からキャラバンに殺到して来るザッコ族の数は、二百を下らなかつたろう。重装を誇るキャラバンといえども、手に余る数だったにちがいない。

が、護衛戦士たちには怯んだ様子も見えなかつた。ザッコ族の、神経を引き裂くような奇声を圧してひびき渡る、隊長アッシュの叱咤が、彼らにどつしりと肝を据えさせているようだった。

「慌てるな——充分に引きつける。『花火』を使ってやつらを一気に薙ぎ倒すんだ」

——鋭い、笛の音に似た音を発しながら、何かが飛んで来始めていた。礫だった。ザッコ族の主要な武器は投石器によって放たれる正確な礫と、猛毒を仕込んだ吹き矢である。「馬」を軽妙に操りながら、彼らはこの二つを自在に駆使する。

とつぜん、一斉射撃の轟音がとどろき、護衛陣の輪は

一瞬白煙に包まれた。ハンドガンの一つから、彼らはいっせいに散弾を発射したのである。それは彼らが常用するハンドガンの装弾の一つであり、多数の敵を相手にするには有効な武器だ。ミニレダーが弾頭には仕込まれており、敵のごく間近で炸裂して致命的な散弾をばらまく。

ザッコ族の悲鳴と、その「馬」が大地に叩きつけられる音がにぶくひびいた。狙いすましたその一撃は、收拾のつかぬ混乱を襲撃者の間にもたらしたようだった。

……

戦闘はあっけなく終わった。十分後、草原には動いている敵の姿はなかつた。打ち倒された仲間を残して、遁走してしまつたのだ。野性の本能で、歯の立つ相手ではないことをいち早く悟つたのだろう。ひっそりと静まり返つた草の海には、醜怪な六本足のねずみとザッコ族との死骸とが、点々と散らばっているだけになっていた。

敵密に言えば彼らことごとくが死骸ではなかつたろう。息のある者も混っているらしく、馱車台に立って戦場を見渡していた私の耳に、いくつかの呻きがはつきり届いたからだ。アッシュとその配下に被害はないようだった。場数を踏んだプロの集団だけのことはあった。



額にじんだ汗を絹のハンカチで拭いながら、ザイモンが喘ぎをもらした。

「死体を見るのは私は好かん。いつ見ても気持ちのいいものではないからな」

「まだ息のある連中もいるようだ」私は呟いた。

「彼らはどうするのかね？」

「アッシュに任せるさ。やつは敵を決して許さない。とことん覺をつけるのがやつの習慣だ。まあ、見ているがいい——汚ない仕事だが、やつにとっては単なる手続きに似たようなものだ」

私と、そして部下全員が見守るうちに、アッシュは早くもその「仕事」を始めていた。ゆつたりと倒れ伏したザッコ族の間に駒を進ませ、一人ずつ確実に止めを刺し始めたのである。負傷者のみならず、完全に息絶えていると思われる者にも容赦しなかった。ハンドガン<sup>ハンドガン</sup>の狙いを冷やかかに定め、マグナム弾の一発ずつをその胸に射ち込んでいくのだった。

私はふたたび、かすかな戦慄をおぼえた。その「仕事」を遂行しているアッシュのはるかな横顔に、感情のたゆたいはまったくないようだった。死は、彼にとって完全なビジネスにすぎないのだ。それほどに死に対して自己を明確にしている人間に、かつて私は会ったことが

ない。しかし、それを与えられる立場に立ったとき、彼はどう振舞うだろうか。

むしろ、私はそれが知りたかった。すなわち、アッシュの仮面じみた表情の奥にひそむ人間性の謎に、ぬきがたい興味をおぼえ始めていたのである。

### 3

次の日の夕暮れ、キャラバンは首都ザーネンにぶじ辿りつき、私は後髪引く思いにかられながらも、ザイモンの一行と別れねばならなかった。

私は都市国家ザーネンの君主、ザラセン侯の宮殿へ伺候せねばならなかったからである。ザタールを訪れて以来、私はザラセン侯の庇護を受ける身の上になっていたのだった。

大いなる知恵袋、そして吟遊詩人としても、私の名はすでに星間連邦の星々の間で高かった。メトセラ族は元来芸術にすぐれた感覚を持つ種族なのである。私のパトロンを買って出るのは、銀河辺境の、文明度の比較的低い封建世界の王侯たちの間で、一つの流行となっていたといってもいい。

私の訪れる先々で、競って彼らは私に好意を示し、お